力士の"よそおい"と〈マスキュリニティ〉：ライフストーリー・インタビューからの研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KAWANO, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3843

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

力士の“よそおい”と〈マスキュリニティ〉
―ライフストーリー・インタビューからの研究―

学芸学部　被服学科　川野佐江子

要旨：本論文は、大相撲（財団法人日本相撲協会が挙行する本場所と呼ばれる相撲競技会）に出場できる力士たちの“よそおい”に着目することで、従来のヘゲモニック Hegemonic な男性性「男らしさ」が今、どのような状況にあるのかを論じることが目的である。力士の“よそおい”とは、髷と着物を中心にした階級社会制度の視覚化である。それは、「全体」としての制度に従う力士の状況を説明するが、一方でその制度から覗く隙間に、力士の「個」としてのアイデンティティを表出したいという欲望を生じさせる場として捉えることが可能だ。そのように、“よそおい”の制度が、「全体」を意味するものから、それがゆえに「個」を表出させるものへと変容する状況を、従来の「男らしさ」がそれのシニフィエである〈マスキュリニティ〉へと変容することと重ねて論じていく。

キーワード：よそおい、力士、相撲、マスキュリニティ、ライフストーリー

0. はじめに

本論文は、大相撲（財団法人日本相撲協会が挙行する本場所と呼ばれる相撲競技会）に出場できる力士たちのよそおいに着目することで、従来のヘゲモニック Hegemonic な男性性が今、どのような状況にあるのかを論じることが目的である。

ヘゲモニックな男性性とは、男性中心主義や家父長制度を補完するいわゆる「男らしさ」である。これは近代以降の欧米文化を中心とした社会における、制度のひとつである。

このヘゲモニックな「男らしさ」が、高度消費社会においていかに変容し、消費されているのか、については拙稿（川野 2010)にて述べてきた。今一度振り返るなら、次の通りである。

近代パラダイムの表象としてのヘゲモニックな「男らしさ」は、ボードリヤールが論じるところの消費社会構造において、消費され社会に浸透していく。しかし、その際に、「男らしさ」はシミュラークルとして消費されて行くことになる。「男らしさ」のコピーがコピーを重ねて消費されることで、もはやオリジナルの意味は消滅し、オリジナル無きコピーだけが消費され続けることになる。これは換言すれば、「男らしさ」のシニフィアンだけが流通消費され、「男らしさ」のシニフィエは恣意的な状態で社会に浮遊しているということを表している。しかし、ここで注意しておかなければならないのは、たとえシニフィアンであるとしても「男らしさ」は相変わらずこの社会において消費されつづけているということである。つまり、制度や秩序のイメージとしての「男らしさ」は相変わらず存在し続けるということだ。消費活動は消費する側の欲望の結果発生する、と言うことも、拙稿（川野 2010）で述べた。「男らしさ」が消費されつづけているということは、秩序としてあるいは制度としての「男らしさ」に表象されるものを、人びとは相変わらず欲望しているからだと言える。言ってみれば、「大きな物語」に寄せる人びとの欲望は途絶えていないということなのである。

その中で、「男らしさ」の消費活動は途絶えることがないのであるが、そのシニフィエと変容した「男らしさ」を言い表すのに筆者は〈マスキュリニティ〉という概念を用いている。従来の「男らしさ」とは例えば、肉体的に剛健でマッチョであり、長大であること、生産性（労働力、生殖力を含む）が高いこと、“精神力”にイメージされる「内面」が重視されること、異性愛を秩序とした性制度に固執するなどである。そしてそれらが、“正統”な価値観であるとすることが、われわれの社会を覆っているヘゲモニックな価値観、パラダイムなのである。しかし、その価値観はいまや現代社会の価値観とは乖離があるのではないかとも指摘されている。例えば、「草食系男子」に象徴されるような、優しく穏やかで、恋愛にも積極的でない（生殖に積極的でない）男性たちの出現や、高学歴化に伴うひとりの人間の「子供時代」の延長、晩婚化、少子化などの

社会問題は、右肩上がりの経済成長がひとつの価値観を絶対善として確信させるだけの力をもてた時代とは異なる社会背景をもっている。しかし、ここで注目しておきたいのは、社会的価値観の変容と同時に「価値観」なるものは常にそこにある、ということだ。価値観の内容は変容しても、価値観は存在し続ける。まさに、「男らしさ」が消費され、シニフィアンだけが残存したとしても、そのシニフィアンはコピーされながら消費され続けいているという状況がそれだ。つまり、人びとの中にある何ものかに依拠していたいという欲望によって消費され、オリジナルを失いながらも少しずつ変容し常にわれわれを覆うように存在しているものがある、という状況である。

本論では、この人びとの「何ものかに依拠していたい欲望」を近代以降の社会を覆うパラダイムとして位置づけたい。そして、このパラダイムの具現化を、「男らしさ」とその変容である〈マスキュリニティ〉として論じていく。この変容とはむしろ、高度に発達した消費社会構造における、「男らしさ」のパロディ化であるともいえる。

人びとが日々社会生活を送る際に、認識の有無にかかわらず依拠してしまうもの、つまり人々や社会の価値観や認識の背後にありつづける「大きな物語」を〈マスキュリニティ〉と示すことによって本論では議論を進めていく。特に本論ではこの議論を展開するにあたり、冒頭で述べたように、大相撲の力士たちの“よそおい”を検討のテーマとする。

また本論では、日本相撲協会所属の力士から直接得ることのできたライフストーリー・インタビューを議論の資料としていることが特徴である。ライフストーリー・インタビューを調査方法に用いることは「帰納的推論の方法が基本となっているため、調査をはじめる前に量的調査ほどにはあらかじめ調査計画の全容をあきらかにできないという限界がある」(桜井 2005)ことや、量的調査と比較して、どれだけ客観性や公平性に基づく資料と言えるのか、などの指摘がある。

しかし一方でライフストーリー・インタビューは、

語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、充分に聴衆(インタビュアー、世間など)を意識して語るのである。彼／彼女はもともともっている情報を提供するたんなる〈情報提供者（インフォーマット)〉ではないのである。その意味で、ライフストーリーは過去の出来事や語り手の経験を表象しているというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的な構築物にほかならない。(桜井 2005:38　下線引用者)

と位置づけられる。桜井は、「確固たる社会的事実(「本当のこと」)が存在することを疑わない立場」(桜井 2005：47,倉石一郎「リアリズムと構築主義」)には疑義的な立場を採用している。本論も

社会的現実は人びとの実践のなかでふだんにつくられ、またつくり直されていくもの(桜井 2005：47)

という立場でのインタビュー調査方法を採用し、議論を展開していくこととする。

ライフストーリー・インタビューを実施するのにあたり、本研究では東京都江東区にある相撲部屋をフィールドワークの場とした。そして、インフォーマットとしてＡさん、Ｂさんという２人の力士からの協力を得た。

1. 前提条件として、力士の“よそおい”について

力士[1]の“よそおい”を一言で言えば、髷と着物、あるいは髷と廻しであると言うことができるだろう。しかし、知られていることであるが、力士たちのこれらの出で立ちには、番付の順位によって格差が設けられている。いかなる格差であるのか、以下に触れておくこととする。

1. 1. 土俵の上での“よそおい”

まず、力士のよそおいには相撲競技におけるものが挙げられる。力士は相撲競技において裸体であることが求められる。そして、廻しと呼ばれる締め込みを着けることが義務づけられている。

廻しの締め方は、日本相撲協会の指導普及部が冊子[2]を作るなどして教習普及を行っている。ところでこの廻し姿という条件が、相撲人気を低迷させている原因の１つだとも言われている。2012 年 6 月 15 日の読売新聞・青森版には、かつて多くの力士を輩出してきた県内の中学校で相撲部の廃部が続いており、現在 10 年前の３割にまで減ってしまったと言う記事が掲載されている(「中学力士減少止まらず　10 年前の３割」読売新聞、青森、2012.6.15)。そこでは「県中体連相撲専門部委員長で、田子町立田子中学校の柳田嘉彦教諭（３１）は「人前で裸になるのを恥ずかしがってしまう」と頭を悩ませる。中学校では野球やサッカーなどユニホームを着たがる生徒が大半で、まわしをしめ

る相撲は敬遠されるという。」という状況が報告されており、廻しと相撲人口減少の関係について触れられている[3)]。

大相撲における廻しは、関取の場合、本場所用と稽古用とに区別され使用されているが、幕下以下の力士にはその区別はなく同じ廻しが締められる。本場所、関取は絹の廻しを締めることが許されており、その色も現在はだいぶカラフルになっていることが知られている。一方、幕下以下の力士は稽古場と同じ木綿の黒い廻しを使用する決まりになっている（図１）。関取は白色の廻しを着けて稽古をすることになっており、本場所以外の稽古場でも番付の地位がそのままよそおいに結びつくようになっている。廻しの他、相撲を取る際にはさがりと呼ばれる飾りを廻しに挟み込むが、これも関取と幕下以下の力士では異なっている。関取のさがりは、糊が付けられ堅くまっすぐに形作られているのに対し、幕下以下の力士のそれは、やわらかいひもの状態である。おもしろいことに幕下以下の力士のさがりは色とりどりで、力士が自分の好みで色をかえることができる。関取のさがりが廻しの色と同じであるのに対し、廻しが黒一色しか選べない幕下以下の彼らにとって、唯一個別性を表現できるよそおいの一端といえよう。

他に、関取は土俵入りの際には、化粧まわしという豪華な前垂れ式の廻しを締める。元禄時代に紀州藩主が、かかえの力士に豪華な廻しを与えたのが始まりとされているが、現在でも協賛企業や支援者、力士の出身校などから贈られることが多い。関取という正式の力士であることを披露するという意味も含まれているのだろう。ここでも、あえて力士間に番付の順位による格差を生じさせるよそおいの制度になっている。



図１　幕下力士の稽古風景　木綿の黒い廻しを着用

1. 2. 土俵以外での“よそおい”

いわゆる力士の外出用の“よそおい”も、番付の順位によって格差が規則付けられている。力士の外出着は、着物、履き物とそれに関わる服飾品であることが義務づけられており、それらの番付表による格差について下位の方から簡単に述べると次の通りである。

序の口、序二段の力士は、浴衣のみで履き物は下駄だけである。三段目になると羽織を着ることが許され、足下は雪駄に変わる。幕下になると、外套（コート）や襟巻きの着用が許され、帯も博多帯を締めることができる。履き物は三段目以上から雪駄になるが、幕下までの雪駄はエナメル製のもので、色も鮮やかにおしゃれをすることが可能となる。

さらに、十枚目以上のいわゆる関取に上がると、羽織袴が許され公式の場では紋付き羽織袴を着用する。その際の履き物は、本畳の雪駄になり、これが力士にとっての最高正装となる。

これらの出で立ちは、場所入りやそれ以外の外出の際に見ることができ（図 2）、現在では、原則力士たちは人目に触れる際にはこれらのよそおいでいることが義務づけられている。

また、力士の“よそおい”にはもうひとつ重要な要素がある。それは、髷である。現在、日本社会で義務としてこの髪型をしている者は、大相撲の力士だけで

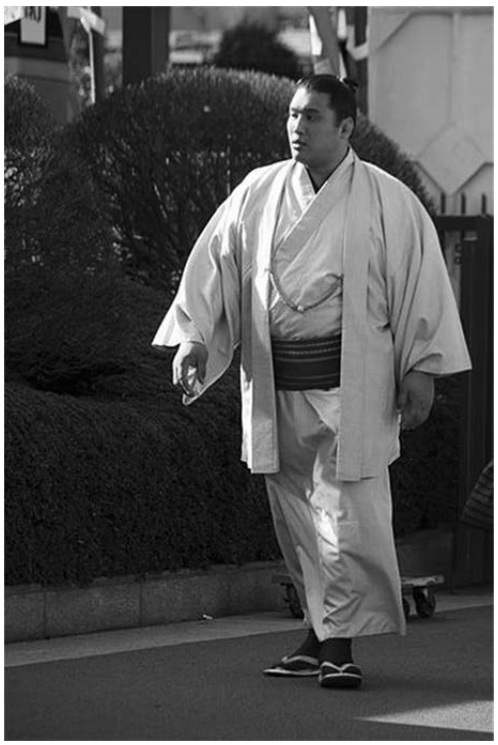


図２　豊真将関の場所入り

ある。この髷も、関取と幕下以下の力士ではその形に格差があり、前者だけが「大銀杏」（図 3）と呼ばれる結髪を許されている。幕下以下の力士は、いわゆる丁髷しか許されていない。いずれも、床山と呼ばれる各相撲部屋専属の髪結いが結い上げる。プライベートでの外出においても、原則この髷でなければならない。

以上のように、力士の“よそおい”には、相撲協会が定めた規律が存在している。協会員である力士たちは、この規律に則ったよそおいと振る舞いを行うことを求められている。

ところで、力士たちがこのように外見について規律付けられているのは何故だろうか。これを論じるには、現在の相撲の在り方や位置づけを検討する必要がある。

現代の力士たち―日本相撲協会に属するおよそ 720 人（2012 年 4 月 23 日現在）は、明治維新以前の衣服と髪型に固執している集団として位置づけられている。この“固執”が、相撲界を一般社会から切り離された唯一独特の集団であり、または“国技”の名の下に日本の“伝統”のひとつの具現だとされる理由にもなっている。

この“固執”は、1871 年（明治 4）年に相撲界にとってキータームとなる「散髪脱刀令」が布令されたことと関係が深い。文明開化のうねりの中で、さまざまな旧時代の風俗習慣がこの時期存亡の危機にさらされており、相撲界も例外では無かった。ここで興味深いのは、「散髪脱刀令」に対する当時の相撲界の対応についての現代の相撲界からの評価である。本来「散髪脱刀令」は、髷を切り、刀を差すのをやめることを認めた法令―つまり髪型を自由にして良いという法令であった。これに対し現代の相撲界側の言説は、「幸いにも新政府部内に相撲に対する理解者が比較的多かったため、断髪令などは相撲界への適用をまぬかれた」（新田一郎『相撲の歴史』講談社学術文庫、2010）、「断髪や廃刀令が施行されたが、力士だけは例外として髷が許



図 3　大銀杏

された。」（大鵬監修『相撲道とは何か』KK ロングセラーズ、2007:）など、力士あるいは相撲が特別の存在であったがために特例として丁髷の禁止対象から外された、というものになっている。この“伝説”が、髷と着物という力士たち「独特」のよそおいに、誇りと権威の根拠を与え、同時に彼らのアイデンティティと身体性に少なからず影響を与えているということが、この後の章で紹介する現役力士たちへのインタビューと参与観察からも伺える。

そもそも、力士たちに課せられた“よそおい”の規律や、相撲に求められる“伝統”“格式”の根拠とはいったい何なのか。これこそまさに、近代以降の社会構造が依拠してきたヘゲモニックなものが構築してきたものではないだろうか。そして、一般社会の側も、力士たちの“よそおい”やふるまいに、それら規律をあてはめようとしている。それか例えば関取が繁華街を着物でない姿で歩いていた、あるいは髷でなくポニーテールをしていた、などということがまるで「事件」であるかのようにマスメディアで報道され、その振る舞いは非難の対象として消費されている。この伝統や格式を期待される力士の“よそおい”とふるまいが「男らしさ」がそのシニフィエを変容させながら〈マスキュリニティ〉として流通消費されているのと同様に、相撲がシニフィエだけになって現代社会に投げ出されているように見えるのは、いささか情緒的すぎる言い回しだろうか。

次に、力士の“よそおい”に求められるヘゲモニー性と、それが現代の消費社会構造の中でいかに変質化しているのかについて述べていく。そこでは、現代の若者でもある力士たちから得られたライフストーリーを参照しつつ、〈マスキュリニティ〉化する―シニフィエ化する、パロティ化する―大相撲そのものについても触れていく。

2. 力士のライフストーリーから見る“よそおい”の〈マスキュリニティ〉

本論でインフォーマットとして主に協力してくれたのは、先述したように、某相撲部屋に所属している A さんと B さんである。どちらも、10 代から角界入りしている現役の力士で、現在幕下以下の地位にいる 20 代前半の若者である。彼らのライフストーリーからは、いわゆる相撲協会が提唱する制度としての“よそおい”と個人のアイデンティティの表現とを、その“よそおい”の中に両立させているということが分かってきた。

2. 1. ヘゲモニー―「男らしさ」―へ同化する力士のアイデンティティ

相撲協会が提唱する“よそおい”の規律には、「国技としての品格」という大きな大義名分が含まれている。しかし、相撲が国技である根拠は、どこかに明文化されているものではないということは知られている。現在、相撲が国技とされるの理由は、1909（明治 42）年に東京本所元町に相撲興行の常設館として落成した建物に、「国技館」と命名されたことによる。「相撲を「国技」とする言説が世間にひろくおこなわれるのは、実はこれより後のこと」（新田一郎 2010：288）なのである。明治以降相撲に国粋的なイデオロギーや、それに伴う“日本の伝統”としての意味づけが加えられ、力士の肉体へも「力」「勝」が象徴されるようになり、相撲制度そのものが、ヘゲモニーの象徴として消費されるという歴史をたどってきた。

人びとにとって、イデオロギーやパラダイムは、具現化させることで理解されやすい、あるいは受け入れやすいものになる。その意味で、相撲の勝ち負けは単純明快であり、かつ、髷と着物という古い時代の出で立ちが今もなお受けつがれている点は日本の歴史の永続性を物語らせる。一見して理解できる相撲の単純さは、伝統というイデオロギーの具体化として都合が良い。また相撲は男性だけが土俵に上がれるという神事でもあり、人びとが熱狂する興行でもある。一方で地面に円を描けばそこに土俵ができあがり、道具は要らずに体ひとつで誰もが相撲を取ることができる。メディアの発達とともに相撲は大衆化し、増々身近なものとなって、その中からヒーローが誕生する。相撲は夢や希望、サクセス・ストーリーを託されながら、「国技」という“伝統”や“格式”を何の矛盾もなく受け入れてきたのである。

そのような人々の期待や「国技」というイデオロギーを持たされてきた相撲界の力士たちは同時に、現代を生きる若者でもある。彼らは、相撲協会が示す「国技」としての“よそおい”を充分に受け入れており、かつそのイデオロギーについても自ら意味を見いだしている。

A さん：着物にこだわりたいし、誰が見てるかわからないわけじゃないですか、お相撲さんだと。―中略―それだけお相撲さんは姿を見せなきゃダメなんだ、人にですね。常に見られてる（という意識を持たなければならない）。

この言葉から分かるのは、力士というアイデンティティは、A さん個人のアイデンティティよりも優先されるべきだと、彼自身が考えていることである。彼らがよく言うのは、髷を結って、着物を着ているのは、唯一力士だけであるということだ。つまり、髷をしている段階で、すでに他者の視線は彼個人を通り抜けて、「お相撲さん」全ての表象を彼の姿に見てしまう、ということを、彼が理解しているというなのだ。これは、換言すれば、相撲のヘゲモニックな部分―相撲の「男らしさ」を、彼自身が「大相撲の力士」として全身で引き受けているということでもある。

「大きな物語」としての相撲を、むしろ壊さないようにという使命感のようなものを、このときの彼は語っていた。それは、相撲界とはそれまで接点のないインタビュアー（筆者）に、彼が「世間」を読み込んでいたからであり、また、彼自身の住まう世界への誇りが背景にあるからだろう。彼の住まう世界は、「国技」を背負わされているのであるから、その「国技・相撲」の権威性に対し、自らを従属させ、依拠し、同化させることは至極あたりまえの振る舞いであろう。

2. 2. ヘゲモニー―「男らしさ」―から生じる力士のアイデンティティ

このように、力士は着物で外出しなければならないという原則を、力士としてもつべきアイデンティティとして受け入れている A さんであるが、別の機会に次の発言もしている。

A さん：（着物は）嫌いじゃないです。だって今しか着（ら）れないっていうのもあるし。俺らしか着ないわけですから。相撲取り 700 人しか。

この発言は、力士の義務として着物を着るというよりも、むしろ着物を着られる特権的な立場としての力士のよそおいを楽しんでいることが伺える。

この「今しか着（ら）れない」という発言の趣旨は、彼の説明によれば次の通りである。まず、一般的な生活の中では、着物を日常的に着る機会はほとんどないということ。次に、ある程度の身体的な恰幅の良さが着物の着用にあたって審美的効果を高めるということを知ったこと。また、この審美的効果を保っていられるのは、少なくとも力士でいる間だけだろうという期間限定的であること。主にこの 3 点である。

着物と髷という“よそおい”が、期間限定的であるという認識は、その期間における充足感をできるだけ

満足させようと欲求するだろう。また、着物と髷に限定された力士の“よそおい”は、むしろ力士以外の者が力士の“よそおい”をすることを制限することにほかならないのだ、ということを彼が認識していることが伺える。力士というある特権的な立場にいることを、充分に快感として受容していることがわかるのだ。

これはつまり、“制度”というヘゲモニックなものが、個人のアイデンティティを背景に消費された結果、その“制度”が単なる全体的かつ支配的なものでなく、それ自体の消費の過程で個人的な快楽へと変容したということが言えるだろう。「男らしさ」が〈マスキュリニティ〉へと変容したように、全体的なものが個的なものの欲望を通過することで消費され、それまでと異なるシニフィエを持って存在し続けるのである。



図 4　衣食住は同じ空間で行われる

ところで、繰り返しになるが、本論のインフォーマットたちは現代を生きる 20 歳代の若者でもある。大相撲の世界は、「生活全てが相撲」であると言われている。稽古や食事はもちろんだが、生活の中で生じる人間関係やさまざまな雑用、接客、渉外などは、全て相撲につながり、相撲の制度の中で営まれている。相撲部屋では関取以外は個室を持てないので、まさに他人と寝食を共にする生活は、核家族が主流となった現代日本の家族形態から大きく乖離した状況になる。学生の合宿生活も似たような状態になるが、大きく違うのは、力士である彼らには、これら寝食をはじめとする生活の全てを自らの手で行わなければならいないということである。親がいて世話をしてくれたり、マネージャーが細々した作業の代替をしてくれたりなどは一切無い。力士たちは部屋の経営者でもある親方の指示に従い、その親方は相撲界の制度に従う。このような相撲漬けの特殊な環境下で日々共同生活をしている彼らであるが、自分のアイデンティティを全て相撲という「男らしさ」―ヘゲモニー―に開け渡してしまうわけではない。それは B さんの次の発言からわかる。

B さん：(“よそおい”の制限について) 着るものまで制限されたら楽しくないじゃないですか、何も。着るものから履くものから、しいては下着の色も白じゃなきゃだめだとか。そんなこと言われる筋合いないじゃないですか、人間として。

ちなみにこの発言は、彼の場合力士の制限された“よそおい”を充分に理解し、しっかり実践している上での発言である。制度は制度として一度は受容し実践しているが、それゆえに実感として表出した言葉であろう。これは単に制度としての“よそおい”を批判しているのではない。この発言は何年間かの力士生活の中で、彼がこの“よそおい”制度の背景にある「大相撲」というイデオロギーを身体化させているという前提を理解して聞き取らなければいけない。

重要なのは、最後の「人間として」という部分である。「人間として」とは、「1 人の個としての自分」を指しているのだろう。全体としての―「男らしさ」の表象としてのヘゲモニー―「力士」ではなく、「B さん個人」としての人格を指している。

2. 3.「男らしさ」のシニフィアンを保持したアイデンティティ

しかし、さらにここで気をつけなければならないのは、「B さん個人」の人格にはその背景に「力士」としての誇りやアイデンティティがはっきりと存在していると言うことだ。

それはどういうことかと言うと、先述の発言があったからと言って、彼は公式の外出に着物以外を着ることは実際にはないからである。あくまでも、

B さん：場所（相撲の本場所）に行くときは地味な浴衣に。そうでないときは派手目に（好きなように）使い分けていますね。

と言うように、外出に着物を着ている。

このように彼は、あくまでも「力士」という節操の中で、自分の個性を表現することを目指している。これは、B さんだけでなく、A さんも同様の発言をしている。

A さん：俺たちは協会が決めたことやるしかないです

から。―中略―だから俺たちが親方衆になって改革することはできるんですけど、今はね。

まだ若い、言ってみれば下積みの「力士」としての、「分をわきまえた」発言と言えるのかもしれない。つまり非常に制度的立場からの発言であるとも言える。

とはいうものの、人間は個的なものを表出したいという欲望を消すことが出来ない。バタイユの「禁止の侵犯」の概念に結びつけて述べれば、制限や拘束、あるいは隠蔽などの禁止は、それが強調されればされるほど、その禁止を侵犯したいという欲望を強固に表出させる。ここで論じられる「禁止」は、近代の制度がそこから外れるものとして生み出したものである。制度が禁止を生じさせる。禁止とは「フーコーのパノプティコン（図4）」が象徴する近代の究極的管理社会構造が生じさせた、近代的制度では管理不可能な人間の欲望のことでもある。

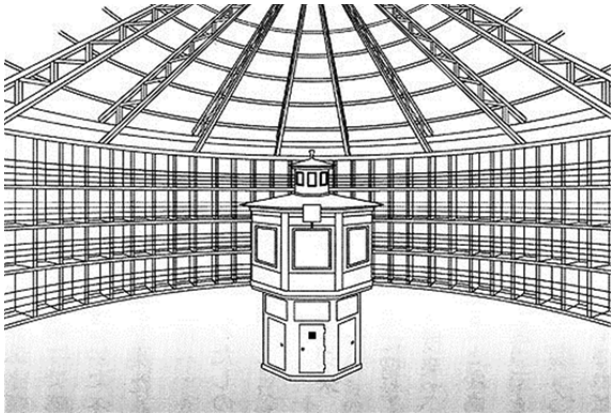


図5　http://book.asahi.com/clip/images/TKY201105230104.jpg

彼ら力士の個的アイデンティティの表出の仕方は、次の発言から伺うことが出来る。

B さん：よそおってるファッションだって、やろうと思えばもっと今風にすることもできるんですよ。例えば羽織のひもをドクロの、アートのヤツにしてみたりですとかね。数珠じゃなくて、シルバーのアクセとかつけてみたりとか。―中略―今風にしようと思えばいくらでもあるわけですよ。

A さん：できる範囲の抵抗はしていますよ

これらの発言から、彼らが単に「力士」という“よそおい”に制限のある立場に甘んじているだけなのではなく、それを前提としながらも「出来る範囲の抵抗」を常に試みていることが分かる。これはまさに、禁止が表出させる個的欲望の具体例である。

それでは、彼らはこの「出来る範囲」をどのように測っているのだろうか。彼らのライフストーリーによるとキーワードは、「渋い」と「粋」であるようだ。

B さん：俺らが目指している究極のファッション的なものは、今風と昔風を調和したような。今風なんだけど、粋だし渋いみたいな。

この聞き取りの際、彼らから何回か「粋」という言葉を得たために、「粋とはなにか？」という質問をした。それに対しての回答は次のようなものであった。

B さん：落ち着く（落ち着いている）関取は粋でかっこいいなって思う。でも10代の時とかに、そういうの見たら、この関取ド派手でかっこいいなって思うかもしれないじゃないですか。でも年取ってくると、あっち（派手な関取）より渋い関取の方がカッコイイと思う。

つまり、「若さ」が派手な色や奇をてらったような柄に関心をひかれるのに対し、ある程度、着物の経験を積んだ者が、次に目指すものに「粋」や「渋い」があるという。つまり、経験の浅い者には理解しがたい感覚を手にしたことへの満足と優越感の表象として、「粋」や「渋い」という言説が使われている。

まだ10代の未熟な力士が、「派手なパステルカラーの浴衣でも着て」いたとしたら、今の彼らは

B さん：俺らからしたら、ああ、バカだなあって（笑）。昔自分もそういうの着てたから。何となく、そういう感覚あるんですよ。

A さん：若けえなって思うんですよ。

B さん：落ち着けよってみたいな。目にはつきますけど、良いなとは、かっこいいなとは思えなくて、目立つだけであって。

というような感想を持つ。

美意識に関して、自分より年配者が善しとしてきた美的感覚を踏襲していくということで、その年配者が持っている経験や知識を獲得しようとする欲求は、年功序列の価値観や権威性を容認する近代的制度の下に

あるものとも言えよう。つまり、従来のヘゲモニックな価値観―「男らしさ」―の範囲内での欲求である。

これまでの発言から分かる彼らの“よそおい”理論は、①「粋」「渋い」⇔「今風」である、②「粋」「渋い」＝経験者である、③「派手」＝未成熟者である、④「粋」「渋い」＞「派手」である、⑤「粋」「渋い」と「今風」はコラボレーションされること究極のおしゃれになる、などである。この理論に基き、「出来る範囲」の“よそおい”が設定され、彼らの言うところの、“おしゃれ”が完成する。

この一連のライフストーリーの中で、彼らにとって「粋」や「渋い」などの“よそおい”の美的感覚のモデルとなるのは、先達の力士たちである。例えば、浴衣の色や染め柄だけでなく、その着方がインタビューの話題となったときに、

A さん：襟元が、浴衣の場合はちょっとはだけている方がカッコイイじゃないかとか。―中略―昔のね、千代の富士とか北の湖とか、がーって胸もと開けて、だらしないくらいに。

という発言を得た。彼らによるとおおよそ現役の関取衆は、この「だらしなく着る」ということが出来ない人が多いという。それは、特に学生相撲出身者に見られるといい、その原因は着慣れていない、着物文化に触れてこなかった、という点にあるのではないか、ということであった。

帯の締め方については特にこの“よそおい”への美意識が触れられた。

A さん：博多帯ってこういうでっかいのを半分に折って、また自分の太さに折って、こうきれいに今（の力士は）巻くんです。（でも）昔のお相撲さんくっちゃくちゃに巻いているんです。

A さん：浴衣とか着物を着てる写真って、昔から見て（今のと）、全然違うんです。

A さん：ある親方がひとり若い衆に怒っていて、「浴衣って言うのはそんなキレイに着るもんじゃないんだよ」と。

B さん：じつは帯も昔は汚く巻くのが粋なんです

B さん：今はそんなんで場所入りしたら、たぶん汚いってののしられて終わるだけだと思うんですけど、昔はそれが粋だったんです。

実際、相撲協会が推奨する現行のような力士への和装着用義務は、実は最近のできごとである。たとえば、戦後すぐの頃には、関脇力道山がバイクで場所入りをしたり（図 6）、初代若乃花が洋装で場所入りしたりと言うことがあった。また、さらにさかのぼれば、1907（明治 4）年、本格的な日本国外への相撲の紹介の最初として、常陸山が渡米しているが、その際は洋装で通したことが知られている（図 7）。冒頭で示したように、紋付き羽織袴が力士の正装とされたのは、相撲の歴史からみれば、新しい出来事であるのだ。

このように実は新しい価値観であるとはいえ、現在の相撲界では、髷と着物にアイデンティファイすることが力士の使命であるかのように求められている。このヘゲモニックは要請は、“よそおい”に対する美意識について、インフォーマットに次のような発言を生じさせる。

A さん：たとえば、三段目や幕下が履いているの（は）エナメルの雪駄なんです。てかてかした。まあそれはそれでかっこいいんですけど。関取衆になったら、畳の雪駄、履けるようになるんです。関取衆しかだめな



図 6　木下大門『北の湖・千代の富士』木版画



図 7　昭和 24 年頃　力道山の場所入り



図 8　常陸山　シカゴにて

んです。そうしたら、上がったら畳の雪駄履けば良いじゃんて思うんです。

相撲や力士に対する様々な要請は、それに応えることを通じて力士自身を作り上げていく。力士は力士の格に併せて「見られる存在」としてあるべきなのではないか、とＡさんはライフストーリーの中でたびたび繰り返している。「力士らしさ」「相撲らしさ」についての規範（モデル）は、彼ら力士にとっては「らしさ」への自己言及であるかのように見える。しかし、この規範（モデル）は実はラカンの“鏡像関係”に読み解けるように、他者からの視線への応答、つまりＡさんの言うところの「見られる存在」なのである。

3.“よそおい”と〈マスキュリニティ〉

3.1.“よそおい”が〈マスキュリニティ〉を醸造させる

ここにおいて、主体を世界の中心に置き、その存在を疑わない、近代パラダイムは大きな転換を迎えることが出来る。本論でいう「相撲」あるいは「相撲道」というイデオロギーを含んだ「大きな物語」は、これまで不変を自明として残ってきた。しかし現在、そのシニフィエは、少しずつ変容をしている。元は自明のこととして、なんの疑いもなく存在した相撲の価値やそこに刻まれたイデオロギーは、その中に閉じ込められることへの反抗を発生させる。具体的には、正しいものとして設定された“よそおい”制度は、それを「崩す」ことをして新しい美意識を発生させる。それは、正しさという唯一無二性を侵したいという人間の欲望だ。

このように“よそおい”が、例えば「正統性」などヘゲモニックなものごと―「男らしさ」―を具体的に変質させることは、人びとの制度で秩序を侵犯したいという欲望を露わにする。あえて崩して着る浴衣、「今風」を古典的価値観である「粋」や「渋い」に取り入れる、いずれもその“よそおい”の新奇性がひとびとを驚かせることになるだろう。しかし、すぐにその新奇性は消費され、コピーされ、さらに消費されて行くことは分かっていることなのだ。相撲の正統的“よそおい”は、常に新奇性の発生の源として存在しつづけることになる。換言すれば、新奇性の根拠としてのシニフィアンになってしまったということである。

このように見てくると、現在の相撲がその規範としたいヘゲモニックなものごとは、実際にはとても恣意的であり、状況によっていかようにも変化可能であることがわかる。とはいえ、今の相撲が目指そうとしている「品格」や「国技としての相撲」は、力士や相撲そのものを今一度、制度の下に管理することで再構成されようとしているように見える。

これはヘゲモニックなものことが駆逐される動きにさらされていることに対する、ヘゲモニック側の反抗的欲求であろう。

3. 2. 管理される“よそおい”

日本相撲協会では、各々の力士について各部屋に所属していることを前提にその協会員として認めている。相撲部屋とは、親方を個人事業主とした特殊な家族形態であるといえるだろう。親方にとって、力士養成員を一人前の力士に養成することは大きな課題のひとつだ。部屋の力士たちを、力士としても、人間としても育て上げる責務を持っていると言われている。

すでに述べたが、力士は生活全てが相撲である。いや、むしろ、「相撲は生活である」とも言われる。したがって、相撲部屋において力士個人のパブリックとプライベートは、両方併せて管理されることになる。相撲は番付社会といわれ、関取になると個室を与えられるが、幕下以下の力士には個室はない。個室どころか関取にならなければ結婚もできない。個や個性、自由や自律を人間形成の重要条件とする西洋の近代的人間観からすると、その扱いには違和感があるだろう。保護者の管理下で衣食住の生活が行われるのは、一般には幼い子供、高齢者など、未成年や社会的弱者である。成熟した大人は、自律独立するのが、当然の生き方であるとされるのが、西洋的人間観である。

ところがこれに対し、日本には、未成熟を善しとする価値観がある。花は蕾を美しいと捉え、未熟性に神秘さや純粋さ、これから開かれる新しさなどを読み込もうとする。近代以前の通過儀礼に見られる若者宿の文化や、クール・ジャパンとして世界的に注目される「ＫＡＷＡＩＩ」の概念などがその例である。

『源氏物語』の紫の上の様に、幼子に自分の理想を託して育て上げるような美意識は、歌舞伎の子役を見つめる贔屓筋の姿や、相撲部屋の支援者にも見られる。これから強くなって出世していく姿を夢に見て、若い力士を応援する相撲ファンはよく見られる。

このように、未成熟な力士を、管理し養成することが相撲協会や親方に課せられた課題のひとつだが、先も述べたように、相撲部屋での力士たちはパブリック、プライベートともに管理されることになる。こう述べると、公私の境界が侵害されている状況かと思いが至るが、そもそも相撲部屋には、二つの対立項を設定してものごとを判断するという「西洋的な視線」がそぐわない部分がある。

たとえば、本論の“よそおい”に関しての例を挙げれば、インフォーマットから次の様な事例を聞き取ることができた。それは、力士たちの下着の色についてである。

ある親方が相撲協会理事に就任した際に、それまで自身の部屋で実施していた「力士の下着は白でなければいけない」という規則を、相撲協会の力士全員に課したことがあったそうだ。白は純白で高貴な色であるから、相撲を取る力士たる者、この色で体を清めなさい、という意味だそうだ。下着とは、“よそおい”の中でも、もっとも体に近い部分のアイテムである。身体に近い分だけ一層プライベートの空間にある“よそおい”であるといえる。その身体的プライベートな問題にまで、協会という公の機関が指示を与え管理するということが興味深い。そして、それに従った力士が多かったという事実もたいへん興味深い。先述したＡさんの発言にあった「協会が決めたことをやるしかない」という言葉に収斂される事象であろう。

ここではこの事象を批判するつもりは毛頭無い。むしろ、西洋的な価値観、つまり、公私は区別されるべき、または全体よりも個別を優先すべきというような、われわれにとって自明の価値観が、ここではあまり発揮されないと言う事実を、もっとポジティブに捉えたいのである。文明開化以降、日本の価値観は西欧のそれを取り入れることで構成され“近代化”されてきた。制度や理論などの合理主義と生産主義とが日本社会を牽引してきた。これらが生じさせたひずみが、今、この社会におけるいくつかの問題の誘因にもなっているだろう。例えば、個の過剰な強調や、曖昧さを払拭させる合理主義は、人びとの社会的関係性に大きく影響しているだろう。

日本では平安時代以来の文学や芸術の中に、「けはい」や「さま」など、具体性よりも抽象性を愛する文化があった。この曖昧さが、合理主義の立場からはわかりにくい、頼りないなどの批判の的になった過去がある。たとえば平安時代のやんごとなき人々が壁のない家に暮らし、パブリックとプライベートの境界と、御簾や



図９　全て手作業で行われる土俵壊し～土俵築

格子など状況によって取り外しの可能なものとしていた生活は、自他を明確に区別しようとする西欧的価値とは異なる「日本らしさ」でもあるだろう。

多くの他人が一つ部屋に暮らすという、現代の日本ではあまり見られない居住環境にいるのが相撲部屋で暮らす力士たちである。それぞれの力士たちがフィジカルもメンタルも、共有しあうような空間で過ごすという西欧的視点からは“不思議な”生活において、現代のわれわれの日常で示されるようなパブリックとプライベートの境界線が有効であるとは思えない。力士たちの生活は、換言すればわれわれにとってはパラダイムが異なる世界だと言えるのかもしれない。

3. 3. こだわりの“よそおい”～差異化への欲望

最後に本論をまとめるにあたり、ライフストーリー・インタビューから得られたエピソードを2つ述べておく。

① 下着について

Bさん：(下着屋さんに対して) この下着の裾を5センチだけ縮めろだとか、ボタンの色が気に喰わんから作り直してこいとか、しょっちゅう言うんですよ。刺繍入れ替えろだとか。

先も述べたように、下着とは身体に最も近い位置にある“よそおい”である。通常、外から見られることは想定しておらず、むしろ、下着それ自体は、その下の身体と同時に隠蔽される“よそおい”である。その隠蔽されるべき部分へ、いわゆる“こだわり”を持つのは、非常にフェティッシュであると言える。隠蔽することで生じるエロティシズムを増幅させる意図とともに、自己と同時に他者の視線をその部分に集中させようという点において、「下着へのこだわり」はフェティッシュな欲望であると言えるだろう。

② 浴衣の袖口ににについて

Aさん：ここ（袖口）は大事ですよ。ここが長い、ちょっと長いとだらしなく見えるんで。ちょっと短いくらいだったら、なんだか肩幅あってかっこよく見えるんですよ。

ロラン・バルトが述べているように、「衣服のもっともエロティックな部分は、その開口部である」。袖口は手首を露わにするが、一方で肩からその手首までを覆う。腕全体が隠されることによって、袖口はエロティックになり、覆われた肩とそれに連なる腕は想像の産物となる。短めの袖口は、そこだけを見れば単なる袖口であるが、その本来の区切りでない部分で身体に区切りを生じさせることで、腕にもうひとつの関節をつくって見せたのと同じことになる。通常とは異なる箇所で分節化された身体は、不可思議な未知のものとして表出する。そこは、未知を啓いてみたいという欲望が現れ出る場にもなる。

ヘゲモニーは未知を凌駕しようとするが、未知はヘゲモニーによって表出する存在であるのだ。

4. まとめ

本論では、力士の“よそおい”をテーマにして、近代におけるヘゲモニックなものがどのように変容しながらこの社会にあるのかについて述べてきた。今回その議論の中心になったのは、若い力士によるライフストーリーである。

現代の日本社会では、依拠すべき大きな物語の喪失感と、同時に新たな依拠への欲望が立ち現れているように見える。例えば若者の右傾化などはその例である。筆者は、どれほど社会状況が変わろうとも、人間がなにかヘゲモニックなものに依拠したい、あるいはそこに身を投げ出してしまいたいと考える欲望は、失われないと考えている。何かに寄りかかることで知覚する圧力は、そこに自分の身体が存在することを認識させるからだ。大きな物語―筆者のテーマである「男らしさ」―は、そのシニフィエが変容し、そのコピーがコピーを生産し、オリジナルの意味は喪失されたとしても、そのシニフィアンだけは人びとの欲望によって求められ続けるだろう。人間は関係性の中にこそ存在し得るものである。したがって、自己存在を担保するなにものかを、つねに求めている。そのなにものかが他者からの視線であり、「人間は関係性の中にこそ存在する」という概念そのものでもあるのだ。

大相撲の世界におけるヘゲモニーは、現代社会の制度やイデオロギーやそれらから抜け落ちたものなどによって、複雑にからみあっている。その意味で、相撲は実はさまざまな社会現象について論じることの出来るテーマでもある。本論では、とくに階級による区別を明確に作りだす、大相撲の“よそおい”に着目して現代社会の構造を論じてみた。相撲の階級制の説明から始める必要があったため、雑ぱくな構成になってしまったことが、反省点である。

また本論では、2人の現役力士であるAさんとBさんから、たいへん貴重な協力を得ることができた。日々

の稽古のほか、本場所を2か月毎に迎える中、多忙にもかかわらずテーマをあまり絞り込まない雑談形式のライフストーリー・インタビューに、そうとうの時間を割いて頂いた。ここで改めて御礼申し上げる。

注

1）本論では、大相撲に出場する選士（日本相撲協会では、選手ではなく選士と呼称している）をすべて力士と呼ぶこととする。正式には、日本相撲協会の協会員であり、番付が十枚目（十両）以上の、いわゆる関取と呼ばれる人たちをさす。彼らには日本相撲協会から、給料・力士補助費・力士褒賞金が支給される。一方、幕下以下の人たちは、力士養成員という立場であり、したがって給与はない。代わりに所属の部屋あてに養成員養成費が支給される。また、彼らは若い衆と呼ばれる。本論では、彼ら全てを力士と呼ぶこととする。

2） 日本相撲協会：まわしの締め方について（PDFファイル:2.79MB）
http://www.sumo.or.jp/kyokai/goannai/0032/mawashi.pdf

3）相撲人口の減少については、検討の余地があるため、別の機会に詳述したい。

参考文献

新田一郎『相撲の歴史』2010　講談社学術文庫
髙橋秀実『お相撲さん』2010　草思社
ニック・クロスリー（西原和久、堀田裕子訳）『社会的身体』2009　新線社
西村秀樹、スポーツにおける抑制の美学』2009　世界思想社
田中俊之『男性学の新展開』2009　青弓社
景山忠広『古写真、ブロマイド、カードでみる大相撲』2001　東京文献センター
33代木村庄之助『力士の世界』2007　文春新書
大鵬『相撲道とは何か』2007　KKロングセラーズ
桜井厚、小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー』2005　せりか書房
川野佐江子「消費社会の中の「男性身体」～変容する「男らしさ」と〈マスキュリニティ〉の行方」2010　立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻　2009年度学位論文
「現代思想」特集　大相撲、11.2010 青土社

Sumo Wrestlers' Dress and "Masculinity": Life Stories of Sumo Wrestlers

Faculty of Liberal Arts, Department of Clothing Science
Saeko KAWANO

Abstract

This article focuses on the dress of Japanese sumo wrestlers as an expression of the hegemony of masculinity in present-day Japanese society. The sumo wrestler's dress consists of the *chonmage* (topknot) and kimono as visible emblems of the hierarchy of society. Their dress indicates the status of sumo wrestlers on the whole as accepting their place in an organization, as well as their individual identity.

In this way, the dress of sumo wrestlers represents the hegemonic organization and the individual one. The hegemonic organization is transformed to the individual one through dress, because the sumo wrestlers desire to represent their identities by suppressing the hegemonic organization. "Masculinity" is used here to refer to the hegemonic system of society. I theorized in my doctoral dissertation that masculinity is transformed to "masculinity" in present-day Japanese society. Notably, the world of sumo is one of androcentrism. The dress of sumo wrestlers represents aspects of both masculinity and "masculinity". In this article I discuss how the dress of sumo wrestlers represents the hegemony of society, elf-consciousness, and masculinity in general.

Keywords : dress, sumo wrestler, sumo, masculinity, life story